

スティーブン・ハップほか〔著〕佐藤美幸・佐藤寛〔監訳〕

本当は間違っている

育児と子どもの発達にまつわる50の迷信

金剛出版・A5判並製

2024年5月刊行

3,740円（税込）

評者＝篠原郁子（立命館大学）



本書は、子育てや子どもの成長に関して広く信じられている「迷信」や「誤解」に焦点を当て、科学的な視点から説明する一冊である。「夜中に赤ちゃんを泣かしたままにさせると、発達に悪い影響がある」「おねしょは深刻な情動問題のサインである」など、多くの親が一度は悩むであろうテーマが並ぶ。ほかには「一人っ子はわがままで、甘えん坊で、社会的能力が低い」「親の離婚はほとんどの子どもの人生を破滅に導く」「すべての男児にはY染色体が一つしかない」など。著者らによるとこれらは全て迷信、つまり「誤り」である。目次を眺めるだけでも気づきがあり、迷信から解放される清々しさも味わえるだろう。

本書は第一に、子育てに悩む親に向けて「データに基づく正しい情報」を伝える意図で執筆されている。同時に、各迷信について、過去の研究報告からそれを見直す現在の研究までがまとめられており、簡潔な研究レビューとしても楽しめる。サンプルの小ささ、統制群の設定がないこと、相関関係と因果関係の混同など、過去の研究の限界点と問題点を鋭く指摘し、疑似科学的な迷信が生まれ、広まる背景にも触れられている。そして、より適切な方法で実施された「新しく」「正しい」知見を示す構成は、小気味よくもある。

ふと、「過去」の研究として引用された論文の発表年に目が留まった。なんと、私の誕生年とほど近いではないか。間違いとされる研究報告が正しいとされた時代に育てられた私……可笑しくなり、私の母に本書の感想を聞いてみると、母が言ったのは「私たちが昔悩んでいたこととは、違うみたい」という一言。つまり、何十年を経て「解」が変わったのかと思いきや、そもそもの「問い」が変わっているようである。

日米の違いもあるだろう。アメリカで誤った「常識」となった迷信のなかには、私自身にも馴染みのないものがあった。逆も然り、日本には日本の迷信が多くあるだろう。Schaie (2005) は知能の生涯発達について、

広く共通する普遍的な特徴はあるが、同時に、いつでもどこでも皆が同じなのではなく、集団の持つ特異性や、時代の特徴による差異があると指摘している。知能だけでなく、人をまるごと育てる子育てにおいても、普遍的側面と同時に、文化、宗教や思想などが響いてくる集団特異性や時代性は存在する。例えば、私が育てられた昭和と、私が子育てをする令和では、親の悩みどころは違って当然だ。しかし、いつでも親は何か悩むのだらうと改めて思う。

「正しさ」への探究心をエネルギーとして、それぞれの地域と時代で研究知見が産出され続けてきた。最新の子育て方法、新しい時代の新たな教育……研究には、悩める親に答えを示す役割が期待されている。けれども近頃私が思うのは、新しい知見は、親へ新たな悩みのタネも蒔いているのだらうということである。研究計画書の審査において一番厳しい質問は、「それは真に問うに値する課題なのか」であろう。心理学者の端くれとして、私は、親が真に悩むに値する視点から子育てや発達を捉えられているだろうか（篠原, 2024）。迷信の答え探しのその先に、問い探しの道が続いている。

▶ 文献

Schaie KW (2005) Developmental Influences on Adult Intelligence : The Seattle Longitudinal Study. New York : Oxford University Press.

篠原郁子 (2024) 子どものこころは大人と育つ—アタッチメント理論とメンタライジング. 光文社 [光文社新書].